

徒然草（現代語訳）（二）——女性・恋愛論

訳 定武禮久

● 恋に悩まない男はあじけない

〔第三段〕 万事にすぐれていても、恋愛の趣きを解さないような男は、甚だ物足らず、折角の美しい玉の盃に底がないような思いがするに違いない。夜の露や霜に萎れる思いをし、あてどもなく彷徨い歩き、親の意見や世間の非難などに気を配る余裕もなく、あれこれと思ひ乱れ、そのくせ、とかく独り寝することが多くて、まどろむ夜もないというようなものこそ、かえっていいのである。

さりとて、ひたすら恋に溺れるというのではなくて、女からはお安くはないように思われるのが、望ましい姿といえよう。

● 色香は、仙人の神通力をも失わせる

「第八段」 世の中の人の心を迷わすことでは、色欲に及ぶものはない。人の心というものは、愚かなものだ。「におい」などは、かりそめのものではないか。それにもかかわらず、一時的に衣裳に香をたきしめたものであると知りながら、何ともいえない好い匂いには、きつと心がときめくものだ。

久米の仙人が、物を洗う女の脛の白いのを見て、神通力を失ったというが、本当に、手足や肌などが、美しくふつくらとつやつやしているのは、色の中でもほかから持って行って付け加えた色ではないのだから、それももつともなことだろう。

● 愛欲の惑いだけは、万人共通

〔第九段〕 女は、髪が美しいことが、何より人の目を惹きつけるものであろう。その人の身分や人柄などは、口をきいた様子だけで、ふすまごしであつてもわかるものだ。折に触れて、何げない仕草で男の心を惑わし、総じて、女が気を許して寝入りもせず、身を惜しいとも思わず、堪えられそうもないことにも堪え忍ぶのは、ただ色の道を思うためである。

まことに、男女の愛欲への執着の道というのは、根深く、源も遠いものである。人の六感に訴える欲情というのは数多いが、それらは皆きっぱりと遠ざけることもできよう。しかしその中で、愛欲の悩みだけは止められないというのが、老いも若きも、智者も愚者も変わらないものと見える。それゆえ、女の髪のをよった綱には、

大象もつなぎとめられ、女がはいた下駄で作った笛には、秋の牡鹿が必ず寄ってくるという伝えられている。みずから戒めて、恐れ慎むべきは、この愛欲の煩惱である。

● 恋の移ろいは世の無常

〔第二十六段〕 風が吹くか吹かないうちに、散ってしまう花のよ
うに、うつろいやすい人の心ひたっていた歳月を思うと、あの時、
感じ入ってしみじみと聞いた一言一言は、今も忘れられないもので
あるが、それが自分とは違う別世界の人となってしまうような浮き
世のならいは、人と死に別れるよりも、はるかに悲しいものである。
それゆえ、白い糸が別の色に染まってゆくのを悲しみ、道の分れ分
かれになっていくことを嘆いた人もあったということである。堀河

院の百首の歌の中に、

昔見しいもが垣根は荒れにけり つばなまじりのすみれのみし
て

という歌がある。「普通っていた女の住まいを訪ねてみると、垣根のあたりが荒れ果てている。茅花にまじって葶が咲いているばかりだ」という一首の淋しい光景は、そういうことが、実際にあったということであろう。

● 雪の風情を介さない男では味気ない

〔第三十一段〕 雪が趣深く降り積もった朝、ある女のもとへいつてやることがあつて、手紙を送ったところ、雪のことに何にも触れなかつたことへの返事に、「この今朝の雪をどう思うかと、一筆も

お書きにならぬようなひねくれた方のおっしやることなど、どうして聞き入れることができましようか。かえすがえすも情けないお心です。」と言つてよこしたのは、まことにおかしかった。今はもう亡き女であるから、こんなちよつとしたことも、忘れ難いものだ。

● さりげなく相手を見送る女の優雅さ

〔第三十二段〕 九月二十日の頃、ある方からお誘いを受けて、夜が明けるまで月見をして歩いたことがあつたが、ふと思ひ出された所があつて、取次をさせて、中へお入りになつたことがあつた。荒れている庭には露がしげく宿っている所へ、さりげなくたきしめている香の匂いがしめやかに漂つてきて、ひっそりと住まっている様子、まことに趣深いものであつた。ほどよい時間に出てこられた

が、なおも、この様子が優雅に思われたので、しばらく物陰から見ていたところ、家の主は開き戸をもう少し押し広げて、月を見ている様子である。もしも、そのまますぐに引込んでしまったならば、残念に感じたことであろう。逢瀬のあとまでずっと見ている人がいようとは、知りようはずもない。こういうことは、ただ、平素の嗜みによることである。しかし、その人は、間もなく亡くなってしまったとのことである。

● 優しい心遣いをする嬉しい女

「第三十六段」女を訪ねなくなつて久しく、どれだけ自分を恨んでいることだろうかと、自分の怠慢を思い知らされ、一言の言い訳もできない心地がしているところに、女の方から、「臨時の人夫はい

ませんか。ひとりほしいのですが」と言つて寄こすのは、とても思
いがけないことで嬉しく感じるものである。「そのような氣立てを
持つ女こそ、いい女なのだ」と言つていた人があるが、本当にその
通りである。

● 変わり者の娘は嫁にやれぬ

〔第四十段〕 因幡の国に、何某の入道とかいう者の娘が、美貌だ
との評判で、多くの人か求婚したけれど、この女は、ただ栗の実を
食べるばかりで、一向に米の類を食べなかつたので、こんな変り者
は、嫁にはやるわけにいかぬと言つて、親が許さなかつたという。

● 質素な家で密やかに趣き深く住まう女

